

哲学歴史学専攻

哲学

日本史学

東洋史学

西洋史学



人材育成の目標

人間の社会と文化の構造・発展を明らかにし、人間のあり方を歴史と文化のなかに追求することを目的とする。人間文化の基礎を研究する哲学と歴史学を統合した教育研究体制を備えることで、人間の社会とその文化の本質と普遍的価値、さらにその変容を明らかにすることを目指す。専門分野への深い知識に加えて、関連分野にも視野を広げられる研究者、広い知識と教養をもった専門職業人を養成する。

哲学専修

哲学
歴史学
専攻

専修紹介

本専修は、教員数は比較的少ないが、狭義の哲学、倫理学、宗教学、美学といった、さまざまな哲学的諸領域をまんべんなくカバーする教員をバランスよく配置しており、ほぼどのような主題についての研究を目指す人でも、適切な指導を受けることができる体制を整えている。

狭義の哲学の分野には、存在論、形而上学、論理学、認識論といった、古来西洋哲学の歴史の中で哲学的諸学の基礎をなす学とされてきた諸領域が含まれるとともに、科学哲学、心の哲学、言語哲学など、哲学のなかの新しい分野についても積極的に研究がおこなわれている。

本専修において研究されている倫理学には、倫理・道徳の本質や原理について考える理論倫理学とともに、特に生命の技術的操作の是非などといった、現代特有の倫理的問題について研究する応用倫理学も含まれる。

本専修で扱われる宗教学は、一般にはむしろ宗教哲学と呼ばれている分野であり、宗教の本質や、成立根拠について、哲学的・原理的な視点から解明することを課題とする。しかしその過程で、キリスト教や仏教などの代表的宗教に関する立ち入った研究ももちろん必要になる。

感性の学としての美学は、一方では人間の感情、情緒、センス等の機能やメカニズムに関する諸問題の、他方では勝義の感性的経験の相関者としての美的なものに関わる諸現象、すなわち芸術や美に関する諸問題の解明を目指すものである。

教育方針

一口に「哲学」と言っても、それが扱う領域は広大であり、問題の性質によって、必要とされる言語能力（英語、ドイツ語、フランス語、ラテン語、ギリシャ語、等）や、前提とされる専門的知識も、まったく異なってくる。したがって、専修構成員の全員が集まっておこなわれる指導の機会だけに頼ってはいは、個々の大学院生の研究主題には即応しきれない。そこで、実質的な指導の大部分は、大学院生個人と指導教員とのあいだの個別指導によっておこなわれている。個別指導では、必要に応じて指導教員のもとで研究的な読書会をおこなう機会を設けるほか、できるだけ頻繁に論文草稿の提出を求め、それを実際の論文にまで完成させるための具体的なアドバイスを与えている。

また、哲学専修では、他大学の研究者を招き、大学院生も参加しておこなわれる年に一度の「哲学研究会」を開催しており、大学院生が日ごろの指導とはまったく異なる視点からの啓発を受ける重要な機会を与えている。さらに、大学院生が自主的に開催する勉強会も、盛んにおこなわれている。

専修の特色

教室行事

修士課程では、年度初めのガイダンス、および後期に2度おこなわれる修論中間発表会が、専修全体としておこなわれる修論指導の機会となっている。

博士課程に関しては、後期に随時、論文指導の機会が設けられている。

さらに、年に一度の哲学研究会でも、大学院生に積極的に研究発表の機会を与え、本学教員以外の参加者から受けた論評を、論文完成のために生かすよう推奨している。

その他の特色

本専修の大学院生に見られる顕著な特徴は、社会人として長らく活躍してきた人が、退職後に本専修を志して入学してくる例が、他専修に比して非常に多い、という事実である。哲学という学問の性格上、一定年齢以上にまで人生経験を積んだ人たちに、とりわけ哲学が訴える多くのものをもっているのだと思われる。本専修には、開拓精神旺盛な若い人たちと、そうした年配の人たちとが、親しく議論を交わしながら互いに研究を高めあうという、独特の雰囲気があり、それが本専修の大きな魅力のひとつとなっている。

哲学は、成果を出すまでに時間のかかる学問である。本専修の大学院生は、学会発表や論文公表をさほど急がず、じっくりと思考を醸成することを重視する傾向が強い。短時間の多産性を重視する現代の風潮に逆行するよう見えるそうした研究姿勢は、しかし本来の哲学にとって重要な性質である。ここにも本専修の大きな特色があると言することができる。

所属教員

仲原 孝（宗教学、宗教哲学、近現代ドイツ思想史）

高梨 友宏（美学、芸術学、西洋近世哲学史）

土屋 貴志（倫理学、応用倫理学、人権問題研究）

佐金 武（分析哲学・現代形而上学）

仲原 孝 教授

NAKAHARA Takashi

専門分野

宗教学・宗教哲学

最終学歴 ▶ 京都大学大学院文学研究科

学 位 ▶ 博士(文学)

[研究内容]

宗教とは何か、人間はなぜ宗教を必要とするのか、という問題について、哲学的に考察することをめざしています。その際の基本的な着眼点は、宗教と哲学とがもっとも深いところで共通の根をもっていることに注目することです。これまでの業績は、カント、シェリング、ニーチェ、ハイデガーといった、近現代ドイツ哲学に関するものが大半を占めていますが、それは、これら哲学者の思想をあくまでそれ自体として解明しながらも、しかも同時にそこに、宗教と共通する源泉をみいだすことができるにちがいない、という関心に導かれています。

メッセージ・教育方針

大学院生は個々人で研究内容が千差万別ですから、授業はあくまで基礎学力(語学力、読解力など)の向上のみに徹し、大学院生の研究内容に即した指導は、徹底的な個人指導を方針としています。

[主要業績]

[著書] 『ハイデガーの根本洞察』(昭和堂, 2008)

[論文] “Versuch einer Rekonstruktion von 'Zeit und Sein'”, in: *Heidegger-Jahrbuch 7*. (Verlag Karl Alber 2013)

「ツァラトゥストラとニーチェとの対話」(『人文研究』第60巻, 2009)

「ハイデガーのシェリング解釈」(『シェリング読本』法政大学出版局, 1994)

[翻訳] マルティン・ハイデッガー『カントの純粹理性批判の現象学的解釈』(ハイデッガー全集第25巻, 創文社, 1997, 共訳)

高梨 友宏 教授

TAKANASHI Tomohiro

専門分野

美学・西洋哲学史

最終学歴 ▶ 大阪大学大学院文学研究科

学 位 ▶ 博士(文学)

[研究内容]

研究上の関心は次の三方向に向かっています。すなわち、①芸術作品の美的体験や美的価値の意味、作品存在の本質等に関する現象学的アプローチ、②近代日本における美学思想の受容史に関する総合的考察、特に西田哲学における美や芸術の意味についての批判的考察、③西洋近代哲学における「感情(情念)」と美的なものとの関係に関する哲学・美学史研究、以上です。そして、これら三つの方向を「哲学的人間学としての美学」という構想のうちに体系的に関連付けて包摂することを、自分のライフワークと考えています。

メッセージ・教育方針

テキスト読解を主とする演習では、思想家の意図を汲むと同時に、今を生きるわれわれの生活実感と関連づけて理解するように努め、また自由な討論の場を創出するように配慮しています。授業や個別指導を通じて学生が主体的な思考力を自ら養うことを期待しています。

[主要業績]

[著書] 『美的経験の現象学を超えて—現象学的美学の諸相と展開—』(晃洋書房, 2001)

『思索の道標をもとめて—芸術学・宗教学・哲学の現場から—』(萌書房, 2007, 共編)

[論文] “Die Philosophie Nishidas als eine "Kunstlehre": Überlegungen zu Nishidas Beziehung zur Kunst- theorie Fiedlers” (*Aesthetics* No.7, 1996)

「西洋近代美学の一概観」(松山壽一監修、加國尚志、平尾昌宏編『哲学の眺望』, 晃洋書房, 2009)

土屋 貴志 准教授

TSUCHIYA Takashi

専門分野

倫理学

最終学歴 ▶ 慶応義塾大学大学院文学研究科

学位 ▶ 文学修士

〔研究内容〕

(1) 倫理学はいかにして可能であるか、倫理学はいかなる方法をとらうのか、等に関する原理的哲学的考察（倫理学基礎論）。(2) 倫理学の事例研究としての医療倫理学（医療をめぐる倫理的問題の研究）。(3) 倫理学の実践としての人権問題研究および道德教育研究。

メッセージ・教育方針

現実の問題を取り扱う「応用倫理学」（医療倫理学も含む）など学際的分野の研究を行う場合、伝統的学問の十分な訓練を受けておかなければ、研究上のアイデンティティを確立することができません。そこで「応用倫理学」の研究を志す方でも、まずは西洋倫理学の基礎的素養や研究方法をしっかりと身につける段階から始めます。

〔主要業績〕

〔著書〕『「ささえあい」の人間学』（法蔵館, 1994, 共著）

『「医学的無益性」の生命倫理』（山代印刷出版部, 2016, 共著）

〔論文〕“The Imperial Japanese Experiments in China,” (*The Oxford Textbook of Clinical Research Ethics*, 2008)

「歴史的背景」『医学研究』（シリーズ生命倫理学 15 巻, 丸善出版, 2012）

「ヘルシンキ宣言の成立」『15 年戦争と日本の医学医療研究会会誌』（第 16 巻第 1 号, 2015）

佐金 武 講師

SAKON Takeshi

専門分野

分析哲学・現代形而上学

最終学歴 ▶ 京都大学大学院文学研究科

学位 ▶ 博士（文学）

〔研究内容〕

時間とは何かをめぐる現代時間論の諸問題を中心に研究を続けています。とくに、(1) 時間の本性と事物の存在に関する形而上学においては、すべては現在にあるとする「現在主義」をベースとして、過去・現在・未来の区別や時間の流れといった概念の明晰化に取り組んでいます。また、(2) これらの哲学的問題が、相対性理論や量子力学といった現代の科学とどのように関係するかについても検討を重ねています。最後に、(3) 我々の時間経験に関する現象学とそこに定位する自己のあり方も主たる考察対象のひとつとしています。

メッセージ・教育方針

これから哲学の研究者を目指すみなさんには、立ち止まってじっくり考える哲学者の側面と、日々走りながら考える研究者の側面の両方を養っていただきたいと思います。生涯学習の一環として大学院をお考えのみなさんには、重要な哲学の問題を深く考察することを通じて、人生をより豊かにするお手伝いをしたいと考えています。

〔主要業績〕

〔著書〕『時間にとって十全なこの世界 — 現在主義の哲学とその可能性 —』（勁草書房, 2015）

〔論文〕“A Presentist Approach to (Ersatz) Possible Worlds,” (*Acta Analytica* Vol. 31(2), 2016)

“Presentism and the Triviality Objection,” (*Philosophia* Vol. 43(4), 2015)

「意識と時間 — 表象説からのアプローチ —」（『科学基礎論研究』, 科学基礎論学会, 2011, 共著）

日本史学専修

哲学歴史学専攻

専修紹介

日本史学専修の特色・強みを三つの視点から紹介します。

①教育・研究体制の幅広さ／本専修には、考古学・古代史・中世史・近世史・近現代史の5名の教員が在籍しています。このように考古学も含めて日本史全般に及ぶ幅広い体制を構築している大学は全国的に見ても少なく、大きな強みとなっています。

②「都市」をテーマとした教育・研究／本専修では、各教員が研究テーマの一つ（主軸）として「都市」を対象としていることも特徴的です。大阪市立大学は、大阪市に基盤をおく都市型総合大学として、「都市」という場が要請する学問的課題に向き合うことを大きな使命としています。本専修は、歴史学的な側面からこの問題にアプローチし、大学の果たすべき社会的な役割の一翼を担っています。

③地域に根ざした教育・研究／本専修では、地域に根ざした教育・研究も重視しています。毎年夏には、大阪府和泉市教育委員会と合同で「地域の歴史的総合調査」（合同調査）を実施し、教員・院生・学部生をはじめ、OB・OGの参加も得て、時代の垣根を越えた現地調査を実施しています。調査の内容は、旧家や寺社等に残された古文書の整理・撮影や、地元の方々への聞き取り、現地踏査などと多岐にわたっています。

上記のような特色を持つ本専修は、全国的にもユニークな専修として定評を得ています。なお、博士・修士論文では、院生は幅広い研究テーマに取り組んでいます。その意味では、専修全体での共同の営為と、院生一人ひとりの自主的な研究の統一という点こそが、本専修の最も重要な特色といえるでしょう。

教育方針

古代から現代までの日本社会の歴史を学ぶとともに、自ら史資料を分析し研究する力量を身につけることをめざします。その際、考古学的遺跡・遺物、古文書、日記や記録、近現代の公文書、習俗・伝承など、さまざまな史資料の分析法を学び、それらを駆使して、政治史・社会史・都市史・文化史などの幅広い視野をもった歴史研究ができるようになることを目標としています。

以上の方針から、前期博士（修士）課程では、自分の専門とする時代・分野のゼミだけでなく、幅広い時代・分野のゼミにも参加することを求めています。この点は他大学との大きな相違ですが、幅広い時代・分野への対応力は、将来、大学・博物館・教育委員会などに就職する際に、必ず求められるものです。後期博士課程では、その上に立って、自分の専門に、より密着した形で徹底的な専門研究の能力を身につけるための教育を行います。

しかし、本専修を教員から院生に対する一方的な「教育」の場とするつもりはありません。毎年行う和泉市の合同調査では、地域の現場で地域史を調査し、ともに学ぶ機会を設けています。ほかにも教員・院生・学部生が一体となった時代ごとの調査や研究会、勉強会などが数多く開催されており、そこでは通常の授業だけでは得られない、多くのことを学ぶことができます。自らの主体的な学修と、共同の営為としての歴史学とが結合した《学知》共同体をめざしています。

専修の特色

教室行事

4月：新年度ガイダンス、5月：大阪市立大学日本史学会大会、6月：歴史学合同ハイキング、9月：日本史学教室・和泉市教育委員会合同調査、各時代ごとの秋合宿（史跡見学や研究報告などが中心）、11月：歴史学合同実習旅行、1月：修士論文提出、2月：修士論文口頭試問、歴史学合同研究発表会、3月：学位記授与式、卒業・修了記念パーティー（この他、夏休みや春休みに、史料調査、古墳の測量・発掘調査を行うこともあります）

出版物

大阪市立大学日本史学会の会誌として、『市大日本史』を刊行しています（1～20号、1998～2017年）。また、本専修では教員全員が編さん委員などとして、大阪府和泉市の市史編さんにかかわっています（先に紹介した合同調査もその関係で実現しているものです）。その成果として、『横山と槇尾山の歴史』（和泉市の歴史1地域叙述編、2005年、和泉市史編さん委員会）以下5冊の市史が刊行されています。

その他、専修教員が中心となって企画したシンポジウムなどをもとにした論集等も多数刊行しています。次にその一部をあげておきます。

榮原永遠男・仁木宏編『難波宮から大坂へ』和泉書院、2006年

塚田孝・佐賀朝・八木滋編『近世身分社会の比較史—法と社会の視点から—』清文堂出版、2014年

その他の特色

本専修では、1998年に教員、学部・大学院の在學生、OB・OGを中心として大阪市立大学日本史学会を設立し、事務局を置いています。当学会は、年1回の大会の開催と会誌『市大日本史』の刊行を通じて、日本史の学術的研究の進展・普及と、会員間の研究交流を進めています。

また本専修は、近畿地方の日本史研究の拠点として、大阪歴史学会や大阪歴史科学協議会などの事務局をつとめてきました。

なお、本専修では海外の大学（イエール大学・ノースカロライナ大学・シンガポール国立大学・上海大学・釜山大学校など）の日本史研究者と恒常的な研究交流を行っています。院生が海外で研究発表する機会もあります。

所属教員

塚田 孝（近世史、身分制・都市社会史の研究）

仁木 宏（中世史、都市史・地域社会史の研究）

岸本 直文（考古学、前方後円墳の研究）

佐賀 朝（近現代史、都市史・遊廓社会史・戦時社会史の研究）

磐下 徹（古代史、郡司制度の研究）

塚田 孝 教授

TSUKADA Takashi

専門分野

日本近世史

最終学歴 ▶ 東京大学文学部

学 位 ▶ 博士（文学）

[研究内容]

私の研究は、3つの大きな柱から成り立っている。第1は、身分制に収斂しない部分 = 「身分的周縁」を含めた近世身分社会史研究である。第2は、身分制の問題を江戸や大坂という都市の場において考える所から進展させてきた都市社会史の研究である。これらについては、最近は大坂の非人身分（= 垣外仲間）について集中的に取り組んでいる。その際、〈法と社会〉の視点から社会の実態に迫る分析方法を提唱している。第3は、和泉市史に関わるなかで取り組んできた和泉地域をフィールドとした地域史研究である。その際、和泉市域に所在した榎尾山や松尾寺などの地方有力寺院を中核とする地域社会構造を解明する《寺院社会の地域史》を構想し、また和泉市域の時代を越えた開発の進展を軸に人々の《生活構築の歴史》を模索している。

メッセージ・教育方針

歴史に様々な想像をめぐらすのは楽しいとの声をよく耳にする。しかし歴史史料と真摯に向きあうと、やわな想像力より歴史の現実はずっと豊かだと痛感する。その豊かな歴史の襲にわけいって行くことはとても楽しい。

私は、歴史に名を残すこともなかった民衆の過去に生きた意味を掘り上げるような歴史学を志してきた。歴史において過去の民衆の生きた意味を確認することは、現在を生きている〈わたし〉自身の生きる意味の自己確認である。自己喪失に陥りがちな困難な時代状況のなかで、こうした歴史学を共同の営為として進めていきたい。

[主要業績]

- [著書] 『都市社会史の視点と構想—法・社会・文化—』（清文堂出版, 2015）
『大坂の非人一乞食・四天王寺・転びキリシタン—』（ちくま新書, 2013 年）
『近世身分社会の捉え方—山川出版社高校日本史教科書を通して—』（部落問題研究所, 2010）
『近世大坂の都市社会』（吉川弘文館, 2006） 『歴史のなかの大坂』（岩波書店, 2002）
『近世身分制と周縁社会』（東京大学出版会, 1997）

仁木 宏 教授

NIKI Hiroshi

専門分野

日本中世史

最終学歴 ▶ 京都大学大学院文学研究科

学 位 ▶ 博士（文学）

[研究内容]

日本中世の都市史、地域社会史を研究している。中世都市は、京都、寺内町、「山の寺」、港町、城下町など、多様でバラエティに富むのが特徴である。これらの都市の変遷を実証的・理論的に解明してきた。また全国規模の流通の中での都市の形態についても研究を進めている。文献史学のみならず、考古学、歴史地理学、建築史学（都市史学）などとの共同作業にも取り組んでいる。また近畿地方を中心とする地域社会についても研究を深め、社会の全体構造を立体的に解明してきた。社会のあり方が、大名や統一政権をどのように規定しているのかという視点から権力にも注目し、近世社会の変容を構造的にとらえることも試みている。平安京・京都研究集会、1617会などの研究集会を主催し、科学研究費などを活用することで、日本中世史研究全体の活性化にも寄与したい。

メッセージ・教育方針

日本史学は文献史料を正確に解読することが学問の基礎である。史料からどのように歴史像を描いてゆくのか、きっちりと学んでほしい。一方、中世史を研究するためには「現場」を知ることも大切である。年2回の合宿、月1回の遠足などの機会に中世の都市や村落の遺構・遺跡をフィールドワークし、地域の中で歴史像を鍛えることにも心がけている。大阪市立大学の日本史研究室での共同研究を糧に、大学教員、博物館学芸員、文化財専門職員などとして日本全国で活躍する研究者を育てることが私の目標だ。

[主要業績]

- [著書] 『空間・公・共同体—中世都市から近世都市へ—』（青木書店, 1997）
『戦国時代、村と町のかたち』（山川出版社, 2004）
『京都の都市共同体と権力』（思文閣出版, 2010） 『守護所と戦国城下町』（高志書院, 2006）
[共編著] “The city of Osaka in the medieval period: Religion and the transportation of goods in the Uemachi Plateau”, (*City, Culture and Society* Vol.9, 2012)

岸本 直文 教授

KISHIMOTO Naofumi

専門分野

日本考古学

最終学歴 ▶ 京都大学大学院文学研究科

学 位 ▶ 博士（文学）

〔研究内容〕

古墳時代の研究、とくに前方後円墳など古墳にもとづく社会関係を追究している。3世紀～6世紀の古墳時代400年間は、農耕社会の定着の上に、倭王権が生まれ国家形成に進む時代である。列島規模の関係が生まれていることは、前方後円墳の共有を典型とする古墳の築造に示されるが、それは倭国王墓を頂点とする身分的秩序を表し、この時代の国家体制の基軸であった。弥生時代の終末からいかに倭王権が生まれるのか、できあがった倭国は、東アジア情勢の影響を受け、また不安定な王権は政治変動を繰り返すが、次第に中央権力が卓越していく、そうした過程を古墳から具体的に解明することをめざしている。また近年は、中央権力の卓越の上に前方後円墳の築造が廃止され、墳墓の築造を規制していく6世紀末から7世紀の、古墳の終焉に取り組んでいる。

メッセージ・教育方針

歴史学の一分野である考古学の長所は、取り扱う資料が遺跡であり、時代・地域・階層的偏差が少なく、人の暮らしあるところ必ず材料が存在する点にあり、文字資料がある場合の具体性と異なる意味で、社会の実態を比較的公正にとらえうる。また各時代に残された集落や墳墓や官衙や寺院などから、比較的長いスパンでの社会の変化をたどることも得意である。研究は自由だし、自発的なチャレンジ精神が重要。学術研究を進める大学は、同志が集まるところで、教員・大学院生・学部生の別なく自由に議論し、ともに学ぶところだと思う。

〔主要業績〕

〔著書〕『史跡で読む日本の歴史 2 古墳の時代』（吉川弘文館, 2010, 編著）

『和泉郡の条里』（和泉市史紀要）第19集（和泉市教育委員会, 2012, 編著）

〔論文〕「前方後円墳の2系列と王権構造」（『ヒストリア』第208号, 2008）

「倭における国家形成と古墳時代開始のプロセス」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第185集, 2014）

佐賀 朝 教授

SAGA Ashita

専門分野

日本近現代史

最終学歴 ▶ 大阪市立大学大学院文学研究科

学 位 ▶ 博士（文学）

〔研究内容〕

現在の研究テーマは、四つである。①近代大阪の都市社会史研究。近代大阪の都市社会を構成した、多様で個性的な地域社会を具体的に明らかにしてきた。居留地や工場地域、スラムや遊廓地のほか、近年は市場社会にも関心を広げつつある。関連して、1920年代の都市社会政策・住宅政策や方面委員制度に関する業績もある。②「遊廓社会」史研究。近世～現代を視野に、日本列島各地の様々な遊廓の比較類型史的研究を進めている。③戦時下の社会についての研究。「十五年戦争」期の国民動員政策が地域社会や市民生活に及ぼした影響とそれに伴う社会変容について、軍事援護を主な素材に論じている。④近代和泉地域の研究。近代和泉地域に普及した綿織物業の実態と生産・流通構造や地域社会との関係について現地調査を進め、和泉市史などで叙述している。

メッセージ・教育方針

歴史学は、過去と現代の対話である。私が専攻する地域史は、名もない民衆の各時代における生活実態や、歴史的イベントとの関わりを、地域史料によって復元し、その意味を考えるものである。近世～近現代の地域史は、新史料や新しい史実を、自分の手で明らかにする醍醐味も味わえる。近現代の社会は、地理学や社会学などの対象にもなるが、歴史学は、政治・経済・法・社会・文化などにわたる人間の営みをトータルに捉え、多様な史料を正確に解釈・分析して社会的現象を客観的に捉える科学的方法の最も基礎的な学問であり、そこに強みがある。

〔主要業績〕

〔著書〕『近代大阪の都市社会構造』（日本経済評論社, 2007）

〔共編著書〕『シリーズ遊廓社会 1 三都と地方都市』（吉川弘文館, 2013）

『シリーズ遊廓社会 2 近世から近代へ』（吉川弘文館, 2014）

〔論文〕「居留地付き遊廓の社会構造—東京築地・新嶋原遊廓を素材に—」（『部落問題研究』203号, 2013）

“Urban Lower-Class Society in Modern Osaka”, (英訳 John Porter) (City, Culture and Society Vol.9, 2012)

専門分野

日本古代史

最終学歴 ▶ 東京大学大学院人文社会系研究科

学 位 ▶ 博士(文学)

[研究内容]

奈良・平安時代を中心とした日本の古代史を専門としている。

主な研究テーマは、古代の地方行政の末端を担った郡司の研究で、郡司を切り口に、古代国家の地方支配や地域社会の在り方を考察している。近年では、大阪周辺地域の古代史研究にも取り組んでいる。

また、平安時代の貴族の日記の読解・註釈も行っており、当該期の政治・行政システムを分析している。

両テーマともに、一つ一つの史料を丁寧に考察すると同時に、日本の古代国家像を複眼的に明らかにしていくことを目標に研究を進めている。

メッセージ・教育方針

古代史の史料は限られている。したがって、様々な種類・分野の史料を取り扱えるようになることが大切であると私は考えている。自分の専攻する分野だけではなく、幅広い視野を持って研究に取り組むことで、豊かな古代史像を描くことができるはずである。その意味で、日本古代史はいまだ色褪せない魅力と可能性を備えた分野だといえるだろう。

[主要業績]

[著書] 『御堂閔白記全註釈』(思文閣出版, 2007・2009・2010, 共著)

[論文] 「郡司と天皇制」(『史学雑誌』116-12, 2007)

「郡司職分田試論」(『日本歴史』728, 2009)

「郡司譜第考」(『ヒストリア』227, 2011)

「年官ノート」(『日本研究』44, 2012)

東洋史学専修

哲学歴史学専攻

専修紹介

大阪市立大学東洋史学専修は、中世から近代までの中国史、近現代の南アジア史、近世・近代の中東・西アジア史を中心に、アジア諸地域の歴史を幅広く研究対象としている。本専修では、教員や大学院生個々人がそれぞれの対象地域の研究に、社会や政治、経済や文化など、様々な観点から取り組むとともに、マクロな視点から人類社会の歴史構造に迫ろうとしている。

本専修の研究者は、それぞれの関心に応じて、種々多様な形式で、様々な言語で表された原典史料を用い、複眼的に歴史事象にアプローチしている。具体的には、中国の古代出土史料、正史や実録、文集、族譜、裁判資料、民国期の現地調査資料、王統系譜、政府刊行物、会計帳簿、インドの民間企業公文書館やインド国立公文書館や各州政府公文書館が保有する一次史料、オスマン・トルコ語やアルメニア語の中央政府行政文書や請願書、歴史的刊行物、ヨーロッパ諸国の外交文書といった文字史料、さらには絵画や口述史料、現地調査で得られた情報が挙げられる。そしてこうした諸史料から得られた情報を、政治学や経済学、宗教学、社会学といった隣接諸学問の成果を踏まえて分析することで、アジア諸地域の歴史と、それを取り巻く世界史像を描くことを目指している。

教育方針

本専修における研究の指導は、中国史、インド史やイスラム史といった個別領域での研究の深化と、他地域を扱う研究者からの助言や批判を通じてなされる相対化という二つの段階を交互に積み重ねることから成り立っている。前者に関しては、教員個々人の演習を通じた史料の読解や分析、論文の個別指導に加え、本専修の教員が中心となって開催される、中国近世近代史研究会や宋代史談話会といった研究会、オスマン史料講読会などの勉強会を通じてなされる。また、本専修に所属する大学院生は、それぞれの専門分野に応じて学会や研究会に積極的に参加し、学外の研究者と積極的に交流を持つことが期待される。後者に関しては、東洋史学専修の教員と大学院生全員が参加する演習および、西洋史、日本史学専修と合同で例年二月に開催される研究報告会を通じてなされる。こうした場において、研究関心の近い教員、院生だけでなく、他地域を扱う研究者からも助言や批判を得ることで、本専修の大学院生は、より大きな文脈に研究成果を位置づけることを目指すと同時に、幅広い視野からアジア諸地域の歴史像を描くことに取り組むことになる。

専修の特色

教室行事

東洋史学専修では、専修に所属する教員、大学院生全員が参加して行う研究発表会を随時開催し、各大学院生が年に2回程度、研究の進捗状況を報告する機会を設けています。例年2月には、日本史学および西洋史学専修と合同で、前期博士課程在学者の研究発表会を行っています。

また、やはり日本史学および西洋史学専修と合同で、6月には新歓ハイキング、11月には歴史学合同実習旅行を、3月には卒業・修了記念パーティーを行っています。

その他の特色

東洋史学専修には、大学を卒業してそのまま進学した人だけでなく、社会人経験者が多く、研究分野の性格から留学生も多数在籍している点を特徴としています。また、教員はみな研究対象地域など海外で研究・調査した経験が豊富です。多様な文化・経験を有する構成員がお互いに学びあうことができる、そんな環境が東洋史学専修の魅力の一つです。

所属教員

井上 徹（中国近世近代史）

平田 茂樹（中国近世史）

野村 親義（近現代インド経済史）

上野 雅由樹（中東・西アジア近代史）

井上 徹 理事兼副学長 * 現在、文学研究科から一時的に離れています

INOUE Toru

専門分野

中国近世近代史

最終学歴 ▶ 名古屋大学大学院文学研究科

学 位 ▶ 博士（歴史学）

〔研究内容〕

専門は中国近世近代史。おおむね明清時代から民国期までの時代を中心として、家族・宗族、地域や都市の社会構造、アジア都市の比較、商品流通と国家の徴税政策との関係、民族問題（とくにヤオ族）、アジア海域の交流などのテーマを扱ってきました。最近とりわけ関心を抱いているのは、明代に辺境であった珠江デルタが科挙官僚制を軸とする儒教化のシステムのなかに組み込まれ、漢族の先進地域へと上昇していくプロセスを明らかにすることです。

メッセージ・教育方針

私のゼミでは、授業や研究会を利用して、明清時代、民国期の文献資料や関連の研究論文等を講読して史料読解力、論文作成能力を高めるとともに、現地調査を通じて中国社会の現在の状況への理解を深め、これを歴史分析に活かすことを目標としています。

〔主要業績〕

- 〔著書〕『中国の宗族と国家の礼制—宗法主義の視点からの分析—』（研文出版、2000）
『海域交流と政治権力の対応』（汲古書院、2011、編著）
『<大阪市立大学文学研究科叢書7>都市の歴史的形成と文化創造力』（清文堂、2011、共編著）
〔論文〕「『華』はどのように「夷」を包摂したか？」（『歴史評論』733号、2011）
「明末の商税徴収と広東社会」（『年報都市史研究論』19号、2012）

平田 茂樹 教授

HIRATA Shigeki

専門分野

中国近世史

最終学歴 ▶ 東北大学大学院文学研究科

学 位 ▶ 博士（文学）

〔研究内容〕

研究内容は中国の宋代を中心に、政治史、社会史、文化史など幅広く研究を行っています。政治史については従来の実証的な政治史の方法論にとどまらず、システム、空間、時間、過程、ネットワーク、コミュニケーションなどをキーワードとして、「誰が、いつ、どこで、どのように政治に関わっていくのか」という観点から政治の奥深い姿の解明に努めています。また、近年は「科挙社会」をキーワードとしながら、宋代の社会がどのように展開していたのか、社会史、文化史的なアプローチを進めています。

メッセージ・教育方針

歴史学の研究のためには、幅広い知識、教養が必要となります。受講生の皆さんは、日頃より、歴史学の書籍にとどまらず、様々な分野の書籍を読むように努めてください。また、中国に関わる小説、映画、ドラマを見たり、芸術、文化、風俗に関わる文物に触れることも大切です。授業では、現代中国社会の諸問題に触れながら、受講生が長いスパンで歴史の流れをとらえられるよう努めています。

〔主要業績〕

- 〔著書〕『科挙と官僚制』（山川出版社、1997） 『宋代政治結構研究』（中国・上海古籍出版社、2010）
『宋代政治構造研究』（汲古書院、2012）
『宋代社会的空間と交流』（中国・河南大學出版社、2008、共編）
『文書・政令・信息溝通：以唐宋時期為主』（中国・北京大学出版社、2012、共編）

野村 親義 准教授

NOMURA Chikayoshi

専門分野

近現代インド経済史

最終学歴 ▶ 東京大学大学院農学・生命科学研究所

学位 ▶ 博士（農学）

〔研究内容〕

最近の経済史研究は、証券取引所や職業訓練所のような歴史的に形成された経済制度の機能の有様が経済発展に大きな影響を及ぼすことを明らかにしています。さらに、これら経済制度の機能は地域や時代によって異なり、この差異が、地域や時代毎の経済発展の有様に大きな違いを生み出している、ということも明らかにしています。私は、19世紀半ば以降大きく日本に後れを取ったものの、ここ20年急速に日本との差を縮めているインドの経済発展を規定する経済制度の有様を、世界各地に点在する一次史料と最新の経済理論を用いて研究しています。

メッセージ・教育方針

強い問題意識、一級の一次史料、周到な既存の研究整理、そして熟考された分析視覚を携えて、これまで解明されていなかった歴史的事実を明らかにしたい、という意欲あふれる学生の皆さんをお待ちしています。

〔主要業績〕

〔論文〕 The origin of the controlling power of managing agents over modern business enterprises in colonial India, *The Indian Economic and Social History Review* (vol. 51-1, 2014, Sage)

TISCO's strikes in 1927-29: An initial step Towards a shopfloor democracy, *INDAS Working Paper* (No. 11, 2013)

Sources of industrial finance and volatility in stock exchanges in colonial India, *Paper presented at Asian Historical Economics Conference*, Hitotsubashi Univ. (2012)

Why was Indian steel not exported in the colonial period?—The influence of the British Standard Specification in limiting the potential export of Indian steel in the 1930s, *Modern Asian Studies* (vol. 46-5, 2012, Cambridge University Press)

Selling steel in the 1920s: TISCO in a period of transition, *The Indian Economic and Social History Review* (vol. 48-1, 2012, Sage)

上野 雅由樹 准教授

UENO Masayuki

専門分野

オスマン史

最終学歴 ▶ 東京大学大学院総合文化研究科

学位 ▶ 博士（学術）

〔研究内容〕

多様な文化的背景を持った人々が織りなすオスマン帝国の社会と政治を、キリスト教徒を取り巻く動向と彼ら自身の活動に注目し、トルコ語とアルメニア語の文書や新聞、イギリスの外交文書といった史料を用いて研究しています。これまでは、19世紀のアルメニア人の事例を中心に、宗派共同体と総主教座、「ミット制」議論、非ムスリムのオスマン官界参入といったテーマを扱ってきました。最近では、オスマン帝国をめぐる国際的な環境を視野に入れつつ、非ムスリムをめぐる制度的枠組みの展開の解明に取り組んでいます。

メッセージ・教育方針

歴史学の分野では、世界史的視野を持つことや、異文化間の関係性に対する関心が高まるなかで、西アジア地域はこれまで以上に重要性を帯びてきています。日本で暮らす多くの人にとって、この地域はあまり馴染みのない、理解することが比較的困難な文化圏かもしれませんが、それだけに多くの刺激をもたらしてくれると思います。

〔主要業績〕

〔著書〕『世界史／いま、ここから』（山川出版社、2017、共著）

〔論文〕「ミット制研究とオスマン帝国下の非ムスリム共同体」（『史学雑誌』119-11, 2010）

"For the Fatherland and the State": Armenians Negotiate the Tanzimat Reforms," (*International Journal of Middle East Studies* vol. 45(1), 2013)

「アルメニア人オスマン官僚の教育的背景」秋葉淳・橋本伸也編（『近代・イスラームの教育社会史—オスマン帝国からの展望—』昭和堂、2014）

"Religious in Form, Political in Content?: Privileges of Ottoman Non-Muslims in the Nineteenth Century," (*Journal of the Economic and Social History of the Orient* vol. 59(3), 2016)

西洋史学専修

哲学
歴史学
専攻

専修紹介

西洋史学専修は、文学研究科の改革により2001年度より新たに設けられました。文学研究科の中では歴史の浅い専修に属します。そのため当初は他専修に比してややこじんまりしていましたが、近年は院生も増え内部は活気にあふれています。2014年4月現在、西洋史研究室には指導教員が3名、前期・後期博士課程の大学院生およびODが総勢15名近くいます。指導教員のうち、大黒俊二教授はイタリア中世史および環境史を、北村昌史教授はドイツ近現代史を、草生久嗣講師はビザンツ史を専攻しています。院生およびODの研究領域としては、教員と同じくイタリア中世史、ドイツ現代史、ビザンツ史を研究している者から、カタルーニャ中世史、アフリカ現代史、バルカン現代史、アメリカ独立革命史、ポスト・ビザンティン美術史まで多彩です。西洋史学専修の院生室は、おそらく文学研究科の中でもっとも多くの言葉が飛び交い、世界各地の多様な文化が会おう場といえるでしょう。

教育方針

西洋史学専修では、西欧・東欧・地中海地域からアメリカ合衆国にわたる諸社会の特質を、歴史的分析の手法を用いて学ぶとともに、自ら研究する能力を身につけることをめざします。西欧近代諸語の講読を通じて研究文献や史料の読解能力を養うとともに、古代・中世史の場合はギリシア語・ラテン語史料の読解力の養成に努めます。本専修では教員の専攻・図書とともに、ビザンツ史、イタリア史など、他大学ではあまり類のない分野が充実しているのが大きな特徴といえます。しかしもちろん、これ以外の伝統的な西洋史諸分野での研究・教育にも力を入れています。

前期博士課程修了後は、多くの人が本研究科の後期博士課程に進学します。後期博士課程進学後は、海外の大学へ留学する人が少なくありません。これまでロシア、オーストリア、イタリア、イギリス、ドイツなどに留学しています。

前期博士課程のカリキュラムは大きく時代順に構成されています。講義は古代史、中世史、近・現代史について広く学べるよう組んであります。演習では西欧諸国語による研究書講読や、ギリシア語・ラテン語の史料講読を通じて、テキストを正確に読解する力をつけます。さらに研究指導を通じて修士論文の作成をしっかり指導します。さらに教員と大学院生によるラテン語・ギリシア語・ドイツ語の読書会が開かれ、修士論文の作成前には前期博士課程2年の院生だけでの自主ゼミなども行われています。後期博士課程では、教員の個人指導の下に論文執筆や学会発表を行い、課程博士論文を完成することをめざします。後期博士課程の院生は、すでに多くの学会で発表し、学術雑誌に論文を掲載しています。西洋史学専修はこれまでに2名の課程博士と4名の論文博士を送り出しています。

専修の特色

教室行事

研究に関しては大学院前期博士課程、後期博士課程、およびODによる研究発表会を年に数回程度開催しています。また、前期博士課程については日本史学専修および東洋史学専修と3専修の合同で研究発表会をおこなっており、そこには後期博士課程の大学院生も参加しています。教室旅行やハイキングなどもこの3専修合同で行うなど、歴史学として密接な関係を保ちながら運営されています。

その他の特色

各教員の研究分野に応じてイタリア史、ドイツ史、ビザンツ史関係の学会と深い関わりがありますが、専修としてまとまって取り組んでいる学会活動は今のところありません。しかし将来、独自の学会や雑誌を立ち上げるのが西洋史学専修の夢です。

所属教員

大黒 俊二（イタリア中世史、リテラシー研究、環境史）

北村 昌史（近現代ドイツ社会史、ブルーノ・タウト研究、日本・ヨーロッパ交流史）

草生 久嗣（ビザンツ史、宗教社会論、異端学）

大黒 俊二 教授

OOGURO Shunji

専門分野

イタリア中世史

最終学歴 ▶ 大阪大学大学院文学研究科

学位 ▶ 博士(文学)

[研究内容]

中世・ルネサンス期のイタリアを中心に、ことばと社会の関係をさまざまな面から探っています。人がことばを使って生きていくのは普遍的な現象ですが、この行為には、言語学や文学研究でいまだ十分開拓されていない広大な研究領域があることに、50代も半ばを過ぎて気づきました。またこの領域を探る上で、中世・ルネサンスのイタリアが恰好の場であることにも気づきました。それ以後、当時の史料をもとに説教、噂、俗語、書体、悪文、悪筆から歴史を読み取ろうとしています。このような研究を歴史学と認めもらえるだろうか、と不安に思いながらその面白さに憑りつかれているところです。

メッセージ・教育方針

細部を大切にすること、堅固な細部から全体を見通すこと、ミクロコスモスの中にマクロコスモスを見出すことを重視しています。歴史の研究は細かな事実の探求ですが、なぜそのような細かな事実こだわるのか、それは細部から全体が見えてきたときはじめて実感できるものです。院生諸君には講読や演習を通じてこのことを実感してもらえよう指導しています。

[主要業績]

[著書]『嘘と食欲—西欧中世の商業・商人観—』(名古屋大学出版会, 2006) 『声と文字』(岩波書店, 2010)

[論文]「イタリア・ルネサンスにおける「俗語化」—翻訳とリテラシー—」『ことばと社会』(14号, 2012)

「声のゆくえ—15世紀イタリアの筆録説教から—」『思想』(1111号, 2016)

“From Ears to Hand, from Hand to Heart: Writing and Internalizing Preaching in Fifteenth-Century Florence,” in M. G. Muzzarelli (ed.) (*From Words to Deeds. The Effectiveness of Preaching in the late Middle Ages*, 2014, Brepols)

北村 昌史 教授

KITAMURA Masafumi

専門分野

近現代ドイツ社会史

最終学歴 ▶ 京都大学大学院文学研究科

学位 ▶ 博士(文学)

[研究内容]

19世紀ベルリンの都市社会史研究を出発点として、現在は、ナチス政権成立とともに日本に亡命してきたブルーノ・タウトがベルリンで設計したジードルング(住宅地)を題材に、ヴァイマル期ドイツの社会史に取り組んでいます。この時期、欧米諸国では機能性・合理性を追求した「モダニズム建築」による住宅建設が積極的に進められ、新しい生活様式がもたらされます。こうした新しい生活文化の出現を実証的にたどりつつ、タウトの日本文化論や日本における「モダニズム建築」の導入の研究を通じてヨーロッパと日本の交流史にも取り組んでいます。

メッセージ・教育方針

歴史研究というのは、過去の特定の時代・地域で起こったことをきちんと把握し、それを現代のわれわれにも理解できるように説明することです。そのために史料を正確に読み解き、先行研究をきちんと読んで自分の意見を明確にする能力を身に付けていただくことが、私の教育方針の基本といえます。

[主要業績]

[著書]『ドイツ住宅改革運動—19世紀の都市化と市民社会』(京都大学学術出版会, 2007)

[論文]「互酬性から見た近代ドイツ社会—結社と社会国家」(『パブリック・ヒストリー』第9号, 2012)

「ブルーノ・タウトとベルリンの住環境—1920年代後半のジードルング建設を中心に」(『史林』(92巻1号, 2009)

北村昌史・米岡大輔「将来の大学教師としてのスキル向上を目指して—大阪市立大学文学研究科の「大学教育実習制度」2011年度導入における挑戦」(『大学教育(大阪市立大学)』第10巻第1号, 2012)

草生 久嗣 准教授

KUSABU Hisatsugu

専門分野

ビザンツ帝国史、古代地中海史

最終学歴 ▶ シカゴ大学大学院社会科学部歴史学科

学位 ▶ Ph.D. (History)

〔研究内容〕

中世ヨーロッパと地中海、とくにビザンツ帝国（ローマ帝国中世東方領）の政治宗教問題を専攻しながら、中世における「異端視」の構造を明らかにする研究（「異端学」）に取り組んでいます。有名な異端審問や魔女狩りといった出来事は、なぜかビザンツ世界においては見られませんでした。そのビザンツの舞台、アフリカ、中東やスラヴ世界とも交錯した東地中海世界（オイクメネー）の本質を問うことをマクロなテーマとし、一方でその認識が記録された諸文献史料（Heresiology）の解析をミクロなテーマと位置づけています。

メッセージ・教育方針

文明の十字路口にあったビザンツ帝国を専門とするため、多くの時代・地域・言語・学問分野との交流を大事にしています。ビザンツ学専攻希望者にはもちろんのこと、世界史やヨーロッパ文化、キリスト教やイスラームに惹かれた初学者にも、国際性・知的最先端を見ずして計画された大学院プログラムを提供します。

〔主要業績〕

〔論文〕「ビザンツ帝国における宗教的《境界》の生成—正教会異端論駁書を題材に」（『歴史学研究』（833号、2007）

「越境する知をささえるもの—ビザンツの情報集積」（『中央評論』第266号、2010）

「ビザンツの「神秘主義」と「異端」—コンスタンティノス・クリュソマルロスの事例（1140）を題材に」（『エクフラシス—ヨーロッパ文化研究』（第2号、2012）

“Comnenian Orthodoxy and Byzantine Heresiology in the Twelfth Century: A Study of the Panoplia Dogmatica of Euthymios Zigabenos.” (Ph.d. Dissertation, University of Chicago, 2013)